

2010 年度中期教育プログラム一覧

(1) 時代と無意識（担当：小林康夫）

われわれははじめから歴史のなかに存在している。世界の外に存在することを考えることが困難であるように、歴史の外に存在することなどほとんど考えられない。思考も科学も政治も芸術も経済も、人間が構成するものは、歴史というわれわれの根源的な存在様態に貫かれた事象であり、かつ歴史そのものがそのようにして構成されたもののいっさいである。

ある出来事によって歴史的時間性が切断されることで姿を現わすのが「時代」である。とりわけ、「モデルニテ (Modernité)」という「時代」は、ほとんどはじめて歴史が「時代」として自らを規定する「時代」であったと言えるだろう。これ以降、歴史は、それ以前の時間からつねにすでに切断されたものとして、また、来たるべき時間への新たな切断と飛躍のための助走として——すなわち、「時代」として区切られた時間性・空間性として現象し、経験され、記述され、表現されるようになる。

本プログラムでは、時代（＝歴史的時間性）を実存者にとっての根源的な経験として考察し、実存と時間とがロゴスにおいて調停されることで生み出されてきた歴史の哲学、つまりは哲学の歴史を国内外の研究者とともに多元的に再検討する。

(2) イメージ研究の再構築（担当：三浦篤）

このプログラムでは、従来美術史の対象とされてきた絵画を始めとするイメージ群を、「メタ・イメージ」、「パレルゴン」、「イメージとエクリチュール」「ジェネティック」という4つの視点から新たに捉え直す。すなわち、画中画や描かれた芸術家像などメタ・レベルのイメージの機能、イメージを枠づける付随的な要素の役割、イメージ（画像）とエクリチュール（文字）の多様な相関関係、イメージの生成から受容にまでいたる成立過程である。関心を共有する海外の研究者と連携しながら、正統的な美術史学に拘束されてきたイメージ群を異なる角度から照射し、その意味と機能を解明することを、本プログラムの大きな目標とする。

(3) 科学技術と社会（担当：石原孝二）

このプログラムでは、科学技術と社会の多様な関係を、哲学・倫理学・歴史の観点から総合的に捉えることを目指します。特に、脳神経倫理（脳科学技術と倫理）、ロボエシックス（ロボティクスと社会）、参加型テクノロジーアセスメント、発達障害研究と社会などのテーマを中心的に扱っていく予定です。これらのテーマを通じて、科学技術が人間観や社会のあり方にどのような影響を与えるのか、科学技術をどのように規制すべきかを検討していきます。大学院生の海外派遣や海外研究者との連携、「こまば脳カフェ」などによる学外の方々との交流などの活動も積極的に行います。

(4) 近代東アジアのエクリチュールと思考 (担当：齋藤希史)

東アジアにおける文体と思考の空間は、漢字文というシステムあるいは漢文脈によって、一つのゆるやかな圏域を為していた。近代以降、西洋文化との急激な交渉とともに、その圏域はそれぞれの近代文化システムへと再編されていく。このプログラムでは、近代東アジアという大転換の場において、伝統思考と近代エクリチュールあるいは伝統エクリチュールと近代思考がいかなるダイナミズムを演じたかに焦点を当てて、協働型の教育研究プログラムを進める。

(5) 精神分析と欲望のエステティクス (担当：原和之)

本プログラムでは、臨床家および表象文化論の研究者と連携しながら、精神分析の歴史的・理論的研究と哲学の研究を接続することで、精神分析の学際的な研究を基盤とした、文化をめぐる包括的な視野を新たに切り開くことを目指す。文化は、欲望の表出ないし表現を可能にするさまざまな装置を内包しているが、精神分析の「無意識の欲望」という概念はこれを根底的に再問題化した。この再問題化を出発点に、芸術をはじめとした欲望の媒介のさまざまな文化的形態の研究をとおして、本質的に「批判」的な、欲望に固有の所与性をめぐる問いを問う、欲望の「エステティクス (美学=感性論)」の可能性を追求してゆきたい。